

若手芸術家が安曇野に滞在

東京藝術大学 安曇野 AIR 開催

アーティスト・イン・レジデンス

東京藝術大学と連携した「アーティスト・イン・レジデンス」。普段は首都圏で活躍している同校修了生の若手芸術家3人が9月まで市内に滞在し制作活動を行っています。今月号では参加する3人の思いを紹介します。

岡文化課 Tel.71・2463



白井仁美さん (左)
◎プロフィール

1980年東京都生まれ。2010年東京藝術大学大学院美術研究科工芸専攻木工芸研究領域修了。植物を用いた作品を制作している。

鈴木希果さん (中央)
◎プロフィール

1998年東京都生まれ。2023年東京藝術大学GAP専攻修了。「プロセスとしての陶芸」をテーマに作品制作やプロジェクトの企画を行っている。

及川春菜さん (右)
◎プロフィール

1993年宮城県生まれ。2020年東京藝術大学大学院美術研究科工芸分野ガラス専攻修了。「パート・ド・ヴェール」という技法を用いて作品を制作している。

INTERVIEW 安曇野での活動への思いを3人に聞きました。

木工 白井仁美さん

雄大な北アルプスを望み、特徴的な地形や水路を持つ安曇野。リサーチと制作を楽しみながら、これらが描く線や形を表現したいと考えています。自然とともにある暮らしや文化を皆さんから教えていただきながら、イメージの幅を広げ作品を作りたいと思っています。



陶芸 鈴木希果さん

私は、自然と都市の分断を繋ぐ媒介者としての「陶芸」に強い関心を持ち、「プロセスとしての「陶芸」」をテーマに作品制作を行ったり、アートプロジェクトの企画をしています。安曇野の皆さんと関わりながら、安曇野の「自然や土」と「人々の生活」を多くの視点で捉え、作品を制作していくことを楽しみにしています。



ガラス 及川春菜さん

安曇野の広大な自然や空気、環境に触れて、新たな作風に挑戦しながら、心がふわっと明るくなるような作品を展開したいと思います。私自身、高校生の時に地元で開かれたイベントで美大生と交流したことをきっかけに美術の道に進みました。特に若い世代の夢の幅を広げるきっかけになれば嬉しいです。



東京藝術大学交流事業 夕涼みファミリーコンサート

東京藝術大学音楽学部による木管・金管・パーカッションの演奏をお楽しみください。



8月9日(水)
18:00~20:00

場穂高公民館 定200人(当日先着順)
費無料 岡文化課 Tel.71-2463

熊井啓監督作品「ひかりごけ」上映会

昭和18年の冬、北海道の沖合で4人を乗せた船が遭難し、生還したのは船長一人であった。しかし船長には…。実際の事件を元にした武田泰淳の短編小説を映画化。



9月23日(土) 13:30~15:30(開場13:00)
場豊科公民館ホール 観300円 定500人(先着順)
8月1日(火)から穂高交流学習センター「みらい」、豊科交流学習センター「きぼう」、豊科公民館でチケットを購入
岡文化課 Tel.71-2463

邂逅と対話の安曇野紀行 「松澤求策の胸像」

国会開設請願書と、委任状二万一千余通とを携えて、松澤求策、上条蛸司が出発する前日の五月二十二日、桐の湯で壮行会が開かれた。当日、女鳥羽川を渡る人たちの大半は、このために集る松本平の青年たちだった。桐の湯は、庭から表通りまで人が溢れた。(小説『安曇野』第一部 その五より引用)

穂高交流学習センター「みらい」隣の三枚橋公園には、昭和61年に求策の没後100年を記念した胸像が建立されました。志半ばで亡くなった求策の生涯と功績を今に伝えています。小説でも、求策らが活躍する場面が描かれています。



明治初期、国会開設・請願権の実現に向けた運動の中心人物として活躍。自身は志半ばで亡くなりましたが、全国的な自由民権運動の先駆者となりました。1855年、等々力町村(現・安曇野市穂高)の出身。私塾で学ぶなど向上心が強く、板垣退助らにより広がりつつあった自由民権運動に関心をもちました。20代半ばの時、長野県民2万人余の署名を得た「国会開設ヲ上願スルノ書」を携えて上京。右大臣



松澤 求策

第5回 小説『安曇野』の登場人物を知ろう！

の岩倉具視と会うなど、必死の運動が報道されたことで国会開設の世論が湧き上がりました。また、郷里の義民、多田加助の物語を紙面上で連載するなど、民権運動の啓発にも注力しました。

しかし、その後は別の運動が大衆を扇動したとして逮捕されるなど不遇の扱いを受けます。別件で獄中に入り、32歳の若さで生涯を閉じました。その2年後、大日本帝国憲法が公布され、翌年に帝国議会(国会)が開設。帝国憲法は、国民の権利が大きく制限されていましたが、求策らが求めた請願権は認められ、その後の国民運動の武器となりました。

第13回 コラム 市誌編さんだより 伝説になった狐たちが暮らしていた安曇野の松林

安曇野市誌編さん専門調査会
民俗部会 松田貴子

昔話としても馴染みの動物、「狐」は安曇野でも多くの伝説に登場します。例えば、豊科だけでも「法蔵寺の狐」「御殿林の狐」「日光寺の狐」「重柳の狐」などがあります。そして、その狐たちは、松林に多く生息しています。

野部の松林はほとんど見られませんが、伝説からは人々の暮らしだけではなく、かつての植生や生態系などの自然環境も読み取ることができます。

安曇野の平野部はもともと、北アルプスを源流とする河川によって運ばれた砂礫が厚く堆積しています。このような地質は水はけがよく、用水路が現在ほど発達していない時代は、農地としての土地利用は限られていました。このため集落から遠ざかるにつれて人為的な土地利用は少なくなり、乾燥や日光に強いアカマツが広い樹林を作っていました。そんな環境の中で、身近にいた狐が伝説の主人公になっていたのでしょうか。今では伝説の舞台となった平



ホンドギツネ(提供:丸山隆さん)